2015第八回台日原住民族研究論壇

日台原住民族研究フォーラム

8th Taiwan-Japan Forum on Aboriginal Studies

太魯閣族抗日戰爭史學術研討會

Endaan tmgjiyai Truku ni Nihung

タロコ族対日戦争史（タロコ戦役）シンポジウム

Conference on History of the Truku-Japan War

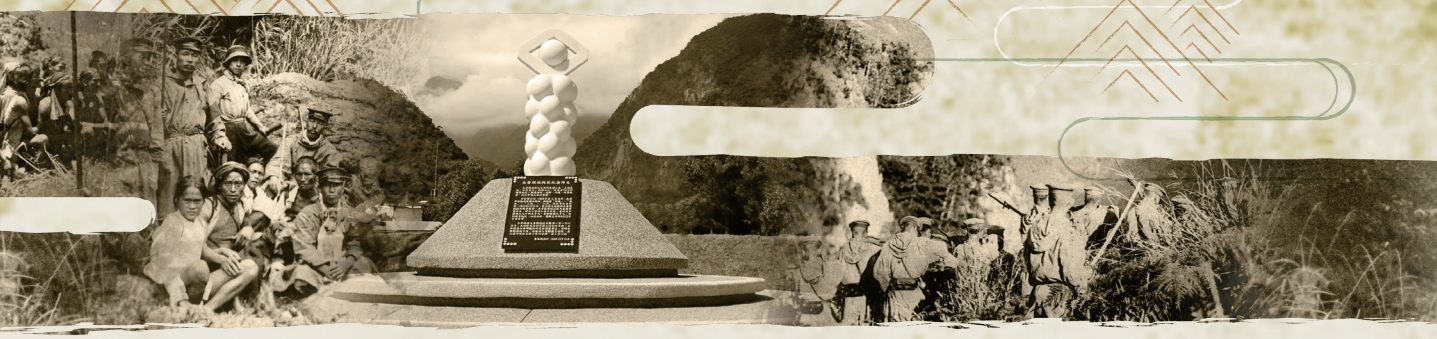
文｜潘姵儒（本刊編輯助理）圖｜政大原民中心

太魯閣族抗日戰爭去年屆滿100週年（1914-2014），為使本歷史議題推向國際，花蓮縣秀林鄉公所與政大原民中心合作，於2015年10月30-31日、11月1日舉辦「第八屆台日原住民族研究論壇—太魯閣族抗日戰爭史學術研討會」，地點為太魯閣國家公園布洛灣管理站。首見以國際會議規模討論太魯閣族議題，國內電視台如原視、中央通訊社等；以及自由時報、中國時報均有報導。

タロコ族対日戦争から去年で満百周年（1914-2014）であり、この歴史的テーマを国際的なものとするため、花蓮県秀林郷公所は政治大学原住民族研究センターと協力し、2015年10月30日から11月1日まで「第八回日台原住民族研究フォーラム－タロコ族対日戦争史（タロコ戦役）シンポジウム」をタロコ国家公園のブロワン管理ステーションにおいて開催した。国際会議という形でタロコ族がテーマとして議論されるのは初めてのことであり、原住民族テレビや中央通迅社などの国内テレビ局、また自由時報、中国時報などでも報道された。

今回のフォーラムでは日本の民族学界において指導的地位を持つ「日本台湾原住民研究会」の研究者の方々を招待

政大原住民族研究中心



本次論壇邀請日本民族學界具領導地位的「日本台灣原住民研究會」研究群，共12名學者來台進行學術交流；台灣學者23名；太魯閣族人8名。論壇議程共安排5篇專題報告、2場專題演講、17篇論文發表及1場綜合座談，主題皆聚焦在「太魯閣族抗日戰爭史相關研究」，並以「台灣原住民族相關研究」為輔。

太魯閣族民族議題首次與國際接軌

開幕式時，大會召集人原住民族研究中心主任林修澈表示：「比起其他原住民族抗日事件，太魯閣事件對於一般大眾普遍陌生。這是太魯閣族的民族議題第一次與國際接軌，因此本次論壇特別具有紀念意義。」

此外，大會特邀日本橫濱國立大學名譽教授笠原政治、北海道大學愛努・先住民研究中心常本照

し、合せて12名の研究者が来台し学術交流を行った。台湾側の研究者は23名、タロコ族の方が8名であった。フォーラムのスケジュールは全部で五つの専題報告と二つの基調講演、17編の論文発表と綜合座談会とに分けられ、テーマはすべて「タロコ族対日戦争史関連研究」にスポットを当てたものであり、「台湾原住民族関連研究」をそれに次ぐものとした。

民族としてのタロコ族が初めて国際的なステージに登場

開幕式において、シンポジウムの主催者である原住民族研究センター長林修澈氏は「他の原住民族の抗日事件に比べ、タロコ事件は一般に知られていない。これは民族としてのタロコ族が国際的な場においてテーマとなった初めてのことである。それゆえに今回のフォーラムは記念すべき意義がある」と述べた。

この他、世界の原住民族をテーマとした研究の視野を広げるべく、フォーラムでは横浜国立大学名誉教授の笠原政治氏、北海道大学アイヌ・先住民研究センター常本照樹センター長をお招きし「日本における台湾原住民族研究」及び「日本における日本の先住民族研究」という二つの基調講演をしていただいた。

第一場專題報告「以愛報仇—井上伊之助」發表人為暨南國際大學東南亞學系兼任助理教授鄧相揚。

樹，發表「日本的台灣原住民族研究」及「日本的日本原住民族研究」2場次專題演講，擴大有關世界原住民族議題的研究視野。

以世界史的觀點看太魯閣族抗日戰爭

論壇以「井上伊之助」為題之專題報告進行開場，由監察院副院長孫大川主持。發表人為暨南國際大學東南亞學系兼任助理教授鄧相揚、慈濟科技大學助理教授石丸雅邦，談及井上伊之助的思想背景、台灣經歷與太魯閣族的關係。對

世界史の観点からタロコ族対日戦争を見る

フォーラムは「井上伊之助」をテーマとする基調報告から開始され、監察院副院長の孫大川氏が座長を務めた。発表者は暨南国際大学東南アジア学系兼任助理教授鄧相揚氏、慈済科技大学助理教授石丸雅邦氏であり、井上の思想的背景、台湾における経歴とタロコ族との関係を取り上げた。これに対し、タロコ族自治推動委員会主任委員のTeyra Yudaw氏は「今回のシンポジウムの目的は、文明／野蛮の二項対立という論述を打ち破りたいというものであり、歴史と正義がこの土地において根付くことである」と応じた。

一日目の論文発表は全部で4つのセッションがあり、すべてタロコ族対日戦争に関連したテーマをその議論の中心としたものであった。その中で、早稲田大学地域・地域間研究機構台湾研究所客員上級研究員の春山明哲氏の発表は、当時の日本政府の台湾に対する軍事的側面、統治政策

政大原住民族研究中心

此，太魯閣族自治推動委員會主任委員帖喇・尤道回應：「本次辦會的目的，即是希望能夠打破文明／野蠻的二元對立論述，讓歷史和正義在這個土地上扎根。」

第一天的論文發表共有4個場次，皆以太魯閣族抗日戰爭相關議題做為討論核心。其中，早稻田大學地域・地域間研究機構台灣研究所客員上級研究員春山明哲的發表，為分析當時日本政府對台的軍事面向、統治政策，以及太魯閣族抗日戰爭造成的歷史性影響，試圖以世界史的觀點來看太魯閣族抗日戰爭。此外，台灣日本綜合研究所研究員傅琪貽，以現有史料為例，強調官方記錄與太魯閣族人觀點的歧異。慈濟大學通識中心兼任副教授鴻義章、東華大學台灣文化學系副教授潘繼道、東華大學台灣文化學系兼任助理教授李宜憲，皆爬梳太魯閣族的「理蕃政策」、在台統治者的觀點與原住民族之關係、以及太魯閣族抗日戰爭的成因。

至於太魯閣族之在地觀點，族人艾忠智則以口述史調查為本，闡述太魯閣族抗日戰爭前巴督蘭地區的族群互動、以及部落耆老口述的戰事記憶，提出「太魯閣族人也應

及びタロコ族対日戦争がもたらした歴史的影響を分析するため、世界史の観点からタロコ族対日戦争を見るというものであった。この他、台湾日本綜合研究所研究員の傅琪貽氏は、現存する資料を例に公的記録とタロコ族の人々の観点の違いを強調した。慈済大学通識センター兼任副教授の鴻義章氏、東華大学台湾文化学系副教授の潘継道氏、東華大学台湾文化学系兼任助理教授の李宜憲氏などの発表は、すべてタロコ族の「理蕃政策」、在台統治者の観点と原住民族との関係、及びタロコ族対日戦争の成因を整理するものであった。

タロコ族の人々の現地の視点というところから、タロコ族の艾忠智氏がオーラルヒストリーの調査を基に、タロコ族対日戦争前のバドラン地区のタロコ族内の動き、及び集落の古老のオーラルヒストリーによる戦争の記憶を述べた。その上で、「タロコ族人も歴史を書き記す権利を持っているはずである」とし、この歴史が改めて振り返られ、そしてこの忘れられた歴史が再構築されることを願っているとした。花蓮県吉安中学校の族語教師であるKaji Cihung氏も集落にあったKbayan一家のオーラルヒストリーからタロコ族対日戦争を分析した。アメリカワシントン大学社会福利博士号候補生のCiwang Teyra氏は歴史トラウマの現代タロコ族に対する健康上の影響について提起した。

時代と地域を越えた原住民族研究の視野

二日目の論文発表も同じく4つのセッションであり、議論のテーマとして、一日目に引き続きタロコ族の民族的テーマが取り上げられた。台中教育大学地域及び社会発展学系助理教授鄭安睎氏は、日本の統治者によるタロコ地区の「隘勇線前進」政策を議論した。南天書局代表の魏徳文氏

擁有書寫歷史的權利」，期能重新反思並重建這一段被遺忘的歷史。花蓮縣吉安國中族語教師旮日羿・吉宏亦以部落Kbayan家族口述史分析太魯閣族抗日戰爭。美國華盛頓大學社會福利博士候選人Ciwang Teyra則提出歷史創傷對當代太魯閣族人健康之影響。

跨時代・跨地域的原住民族研究視野

第二天的論文發表同為4場次，討論主題一方面延續太魯閣族民族議題，如台中教育大學區域與社會發展學系助理教授鄭安睎，討論日本官方於太魯閣地區「隘勇線推進」的政策。南天書局有限公司發行人魏德文，以官方的地圖測繪過程詮釋族群變遷與太魯閣戰役的關係。東華大學台灣文化學系助理教授郭俊麟亦運用GIS系統，修正現存部落歷史地圖的測量誤差，做為理解當時原住民族傳統領域及聚落空間分布的重要線索。

有關當時對台灣原住民族的相關調查記錄，尚有逢甲大學外語教學中心兼任助理教授吳昱瑩的發表，介紹馬淵東一與阿美族人高光邦合作進行的台灣原住民部落調查

位於花蓮縣秀林鄉富世村的太魯閣戰爭紀念碑，於2015年9月23日揭幕，紀念頭目哈魯閣・那威。

は、統治者の地図測量の過程からエスニックグループ（族群）の変遷とタロコ戦役との関係を説明した。東華大学台湾文化学系助理教授の郭俊麟氏もGISシステムを運用して現存する集落の歴史的地図における測量誤差を修正し、当時の原住民族が守ってきた領域、及び集落の空間的分布を理解する重要な手がかりとした。

当時の台湾原住民族に関連する調査記録については、逢甲大学外語教学センター兼任助理教授の呉昱瑩氏の発表があり、馬淵東一とアミ族人の高光邦が協力して行った台湾原住民の集落調査の業績を紹介するものであった。国立民族博物館教授の野林厚志氏は、日本の地理学者内田勣が残したフィールドワーク資料によって、当時における非統治者である在台日本人の原住民族に対する観点を論述した。国立琉球大学法文学部准教授の大浜郁子氏も、田代安定が台東での調査を行った際のタロコ族の調査記録を紹介した。

もう一つのテーマとして、このセッションでは時代と地域を越えた原住民族研究の視角についても議論された。特に東北大学大学院文学研究科准教授山田仁史氏が世界の諸原住民族の首狩り行為を考察した最新研究書『首狩の宗教民族学』は、台湾原住民族の「出草（首狩り）」を議論する上での新たな視野となるものであろう。

タロコ族自治推動委員会主任委員のTeyra Yudaw氏は

政大原住民族研究中心

工作。國立民族學博物館教授野林厚志，則由日本地理學家內田勳留下的田野資料，闡述當時非官方在台日人對原住民族的觀點。國立琉球大學法文學部准教授大浜郁子亦介紹田代安定進行台東調查時的太魯閣族調查記錄。

另一方面，本次研討亦展開跨時代、跨地域的原住民族研究視野。值得一提的是，東北大學大學院文學研究科准教授山田仁史，其最新研究專著《首狩の宗教民族学》，探討世界諸原住民族的獵首行為，可做為討論台灣原住民族出草的新視野。

太魯閣族自治推動委員會主任委員帖喇・尤道，則以「威里事件」為例，探討日本的「東方主義」及對台政策的影響。他認為太魯閣族的對日抗爭，為「傳統價值」與「統治權」之爭，而日本官方對於殖民地「只見蕃地，不見蕃人」的漠不關心，造成對異民族的歧視；希望現今學人對於事件的探討，能夠消除偏見，以人文主義取代東方主義，並找回歷史的正義。太魯閣族學生青年會理事督磬・媧飁、族人簡亞帆，則由「太魯閣族青年學生青年會」組織討論現代太

「ウイリ事件」を例に、日本の「オリエンタリズム」と台湾政策への影響を考察した。氏はタロコ族の対日戦争は、「伝統価値」と「統治権」の争いであったとし、日本の統治者の植民地についての「蕃地のみを見て、蕃人を見ず」という関心のなさが異民族に対する差別をもたらしたと考えている。そこで現在の研究者がこの事件を考察するに当たって、偏見をなくし、人文主義によりオリエンタリズムを置き換えると共に、歴史的正義を取り戻していければとした。タロコ族学生青年会議理事のTunux Wasi氏、タロコ族人の簡亜帆氏は「タロコ族学生青年会」の組織から現代タロコ族人のアイデンティティの問題を議論した。秀林社区発展協会理事長の連美恵氏はタロコ族の「図織（織物上の図柄）」を積極的に保存しており、このことによってタロコ族の人々が伝統技芸を重視するよう呼びかけている。

大阪大学文学研究科招聘研究員の中村平氏は日本の植民地における責任問題を議論した際、「タロコ族の人々が『自分の歴史は自分たちで書く』ということを提起したのは、他者の観点に対する一種の反動を示している。事実上、現代日本社会におけるタロコ地区に対する植民地とし

1914年太魯閣事件發生時，日軍曾派攝影記者隨軍拍攝照片，事後由台灣埔里社街野中寫真館發行明信片。

綜合座談主持人，左起依序為日本橫濱國立大學名譽教授笠原政治、花蓮縣秀林鄉公所文化課長王玫瑰、政大原民中心主任林修澈。

大會特邀日本橫濱國立大學名譽教授笠原政治（左二）、北海道大學愛努・先住民研究中心常本照樹（中），發表「日本的台灣原住民族研究」及「日本的日本原住民族研究」2場次專題演講。兩場主持人分別為原民會副主委鍾興華（左一）、環球科技大學榮譽教授蔡中涵（右二）。右一為政大原民中心主任林修澈。

論文發表第5場次，主題為「台灣原住民族研究動向」。左起依序為與談人公立都留文科大學比較文化學科准教授山本方美、發表人逢甲大學外語教學中心兼任助理教授吳昱瑩、主持人國立靜岡大學名譽教授森口恒一、發表人國立民族學博物館教授野林厚志、東北大學大學院文學研究科准教授山田仁史。

魯閣族人的認同問題。秀林社區發展協會理事長連美惠正積極保存太魯閣族圖織，喚起族人對於傳統技藝的重視。

正如大阪大學文學研究科招聘研究員中村平於討論日本的殖民地責任問題時，表示：「太魯閣族人提出『自己的歷史自己寫』，即是表示對於他者觀點的一種反動。事實上，現代日本社會對太魯閣地區殖民地的歷史認識，與現今的太魯閣族人的歷史認知，必有很大的差距。因此，我們需要對殖民地戰爭和侵略有共通認識，瞭解太魯閣族人的歷史詮釋、殖民歷史的經驗，做為討論日本殖民地責任問題的基礎。」

綜合座談由花蓮縣秀林鄉公所文化課長王玫瑰、日本橫濱國立大

ての歴史認識は、現在のタロコ族の人々が持つ歴史的知識とは絶対に大きな開きがある。そこで私たちは植民地戦争と侵略についての共通認識を持つ必要があり、タロコ族の人々の歴史解釈、植民の歴史の経験を理解し、それを日本の植民地における責任問題を議論するうえでの基礎とすべき」と述べた。

綜合座談会は、花蓮県秀林郷公所文化課長の王玫瑰氏、横浜国立大学名誉教授笠原政治氏、政治大学原住民族研究センター長林修澈氏が司会を務めた。会場は大変な熱気に包まれ、参加した研究者はタロコ族に関する初めての国際会議が大変貴重なことであると次々表明した。目下のところタロコ族対日戦争史についての関連研究はすでにかなり多く

政大原住民族研究中心

學名譽教授笠原政治、政大原民中心主任林修澈主持，現場氣氛熱烈，與會學者紛紛表示太魯閣族的第一次國際會議實屬難得。目前針對太魯閣族抗日戰爭史的相關研究，已累積相當多的口述歷史、官方史料，台日雙方透過本會議，有機會深入交流、對話，從多方面的角度，解讀太魯閣族抗日戰爭史。繼牡丹社事件、霧社事件之後，太魯閣族戰爭議題，自此推向國際學術界。正如花蓮縣秀林鄉公所文化課長王玫瑰所述，本次論壇除紀念太魯閣族人於百年前的壯烈行動，更重要的是希望族人能依著「愛・重生・和平」的道路繼續前行。

走訪古戰場

會議第三天安排太魯閣族抗日戰爭相關史蹟踏查活動，探勘富世遺址、富世紀念碑、新城神社、加灣神社、威里紀念碑；並加入部落巡禮，參觀太魯閣族的編織與鍛鐵，讓與會者走入歷史地景，同時瞭解太魯閣族的嶄新文化風貌。◆

のオーラルヒストリーや公的資料が蓄積されており、日台双方はこのシンポジウムを通して、より深く交流し対話する機会を持ち、多角的な角度からタロコ族対日戦争史を読み解くことができるはずである。牡丹社事件、霧社事件に続いて、タロコ族対日戦争というテーマもここから国際的アカデミーに向けて発信されるだろう。花蓮県秀林郷公所文化課長の王玫瑰氏が述べたように、今回のフォーラムが百年前のタロコ族の人々の壮烈な行動の記念となること、そしてタロコ族の人々が「愛・復活・平和」の道へと引き続き前進してほしい、ということがより重要であろう。

古戦場を訪ねて

シンポジウムの三日目はタロコ族対日戦争関連の史跡の見学を行った。富世遺跡・富世記念碑・新城神社・加湾神社・ウイリ記念碑などを見学した。また集落巡りも行い、タロコ族の機織りと錬鉄を見学し、参加者たちは歴史的ランドスケープに足を踏み入れると同時に、タロコ族の新たな文化の姿を目にした。◆

歷史地景踏查：富世紀念碑（該碑新近於2014年10月15日舉行揭牌儀式）。